

ルソーの夢

——むすんでひらいて考——(その二十一)

海老沢 敏

十一、日本人の歌として(承前)

この明治三十六年版の《讚美歌》の第三十三のナンバリングの右横には〈古今百七十五〉、第二百二十六には〈古今三百二十八〉と星印で注がつけられている(譜例5および6参照)。これ

は明治三十六年版の《讚美歌》に先立って、その前年の明治三十五年(一九〇二年)に日本聖公会によって編集刊行された《^{附古}今聖歌集》^(注56)所載の聖歌の番号を示している。日本聖公会第五總會

(明治二十九年)では、明治二十三年版の《新撰讚美歌》の大きな影響下にあった聖公会の讚美歌実践に対処するために、新しい讚美歌集の編集が決議され、五人の委員(のち明治三十三年の第

六総会で一名追加)が満六年の歳月を費やして努力を重ねた結果が、この《古今聖歌集》であった。この讚美歌集によって日本聖公会の統一的な聖歌集が生み出されたが、この曲集には合計四百十二曲が収められ、大正十一年に《改訂古今聖歌集》が刊行されるまで使用されるのである。

(注56) 《HYMNS NEW & OLD WITH MUSIC 附譜 古今

聖歌集 明治三十五年

《古今聖歌集》の第百七十五は曲譜には〈175 Rousseau (Greenwillow)〉とあり、〈主よみめぐみもて〉で歌われるが、〈礼拝閉会祝福を求む〉と指示されている。一方第三百二十八はやはり〈ルソー(グリーンウィル)〉の指示をもち、〈雑歌 信徒の旅路〉として〈わがおほかみよ つよきみてもて〉にはじまる歌詞をも

っている。もともと《グリーンヴィル》は英国において、英語讃美歌として歌われはじめたことからしても、この曲が、この讃美歌が日本聖公会でも採用されたのはむしろ当然であったというべきであろう。

讃美歌としての《ルソーの夢》、すなわち《グリーンヴィル》あるいは《ルソー》はこうして明治の三十年代後半から四十年代、そして大正年代を通じて歌われていったのである。《讃美歌》は毎年版を重ねていったが、大正九年には《縮刷讃美歌 第一編》^(注57)も刊行され、さらに小型版（大正十二年）も出版されて昭和にいたるのである。

（注57）〈著作権所有 縮刷讃美歌 第一編 委員〉（大正九年、教文館・警醒社）

《讃美歌》ならびに《讃美歌 第二編》（明治四十二年刊）に対する改訂の要求が高まってきたのは大正末期のころであったといわれる。^(注58)大正十五年には基督教音楽聯盟が讃美歌委員会に対し、こうした改訂を要望し、それに応じて《讃美歌改訂委員会》が発足し、改訂の準備がはじめられた。じっさいの改訂作業は昭和三年にはじまり、足かけ四年をかけて新しい《讃美歌》^(注59)が出版されたのであった。今度の改訂にあたっても「各教派から委員を出して作業にあたったが詞・曲とも日本人を主査とし、詞主査は

由木康、曲主査は木岡英三郎で、別所氏と三輪氏も後見役として参加した」^(注60)ものであった。

（注58）《覆刻明治初期讃美歌》（新教出版社）解説所載、原恵
《日本の讃美歌史》（同解説一七ページ）

（注59）《讃美歌 昭和六年十二月十日発行 教文館・警醒社》
（注60）原恵《日本の讃美歌史》（一七ページ）

この昭和六年版《讃美歌》は讃美歌五六五、頌栄六、讃詠二四に聖歌隊用合唱曲九を加えて合計六〇四曲を収録し、明治三十六年版にくらべていちじるしい充実を示している。その性格はまた原恵氏によって次のように提えられている。「この歌集は当時としては聖歌学的にみてかなり進歩的なもので、明治版《讃美歌》が明治初年以來の各版の選歌方針をほぼ継承して一八、一九世紀の英米讃美歌に著しく偏していたのに対し、古代・中世ラテン語讃美歌、ギリシア語讃美歌、宗教改革期のドイツ語讃美歌、フランス語詩篇歌を加え、さらに当時の新傾向であったアメリカの社会福音的讃美歌をもいち早くとり入れ、また従来の日本人作品に新作を加えて全体の約一五パーセントにまで増加し、同時に、日本人作曲の讃美歌曲を加えた」^(注61)

（注61）原恵、同右、一七ページ。

この昭和六年版《讃美歌》には、「しかし明治版からは大多数の

讃美歌がほぼそのまま継承されて」^(注62) いるにもかかわらず、本稿の

主題《ルソーの夢》による讃美歌の旋律、いわゆる《グリーンヴィル》はここでついに姿を消すにいたるのである。こうして昭和年代に入ると、明治初期から長い間、讃美歌のチューンとして親しまれ、半世紀以上にも亘って、教会で歌われてきたこの曲はその生命を、すくなくとも讃美歌としては終えたのであった。もっとも、まったく歌われなくなったのではない。昭和十一年に刊行された《福音讃美歌》^(注63)には第一五〇《祈禱》としてへい、いのれよいのりて 言をうけよのの歌詞によって、この曲が、明治版《讃美歌》とまったく同一の四声体のかたちで収録され、つづく第一五一《あゝ神よ荒野のこのたびとを》も、この旋律で歌われるよう指示されている。上段の曲譜には《Greenville》《J.J. Rousseau, 1752》と指示がおこなわれているのである。この《福音讃美歌》が、《グリーンヴィル》を採り上げた根拠は、しかし、けっして新しい観点からとは想像できない。

(注62) 原恵、同右、一七ページ。

(注63) 《福音讃美歌》編纂者 西条彌市郎、西条さわ 発行者 西条彌市郎 発行所 霊泉社 昭和十一年十月二十日発行
いずれにせよ、すくなくとも日本では讃美歌としての《ルソーの夢》すなわち《グリーンヴィル》が歌われなくなっていた。

各派共通の聖歌集《讃美歌》から公式に除外されたからである。

それはどのような理由によるものであろうか。原恵氏が指摘しているように、この《讃美歌》は、明治版《讃美歌》が十八、九世紀の英米讃美歌に大きく拠っていた傾向を是正した点に特徴があった。《グリーンヴィル》はその点で、きわめて典型的な十九世紀英国の讃美歌なのであった。その点が除外省略の理由のひとつであると考えられるが、さらに加えて大きな理由があるように私には思われる。それは《グリーンヴィル》が、讃美歌の旋律として明治初年から日本で歌われはじめ、明治から大正年間にかけて歌いつづけられたと平行して、これもすでに縷々論じてきたように小学唱歌として、また軍歌として歌われてきたことである。もちろん、小学唱歌としての役割も、明治の後期においては変容し、パロディー化して、軍歌風に、あるいは牧歌風に編曲されることで変質し、当初の目的、意味を失なっていたというべきであらう。また、唱歌にしても、軍歌にしても、この《ルソーの夢》のような西洋から直接移入した旋律ではなく、それぞれの時代を反映して、あらたに作曲される旋律が重用されていく趨勢にあったのである。しかし、とにかく《ルソーの夢》は讃美歌の曲節以外のかたちで、それも長年に亘って人口に膾炙していたのだ。神を讀えるための讃美歌のメロディーが、たとえば敵を殲滅すべく

味方の兵士の士気を鼓舞する目的でたからかに歌われるものでもあるとすれば、それは日本人の感覚にはあまりそぐわないものであったろう。

そればかりではない。明治の末期にはじめられるこの旋律のもうひとつの別の命運が、小学唱歌、そして軍歌としての寿命以上の長い生命を享受してきた讚美歌としての「エルソーの夢」、すなわち《グリーンヴィル》に、私たちの国日本では、けっきょく引導を渡すこととなったように思われるのである。

十二、幼な子の歌《むすんでひらいて》

明治三十四年に創刊された《婦人と子ども》が本誌《幼児の教育》の最初の標題であることは周知のことであろう。日本の保育活動、幼児教育活動に先駆的で主導的な役割を果たしてきたこの《幼児教育研究雑誌》の第九巻第五号（明治四十二年五月号）には池田とよによる《幼稚園に於ける幼児保育の実際》^{（注1）}なる一文がある。

（注1）《幼児教育研究雑誌 婦人と子ども 第九巻第五号

明治四十二年五月五日発行 フレーベル会発行 二一ページ

——二七ページ。

この文章で池田とよは冒頭次のように語っている。「是は某幼稚園に於ける最少幼児一組を担当せる某氏が一年間の受持幼児保育状態を概括して記述したるものにて実際家の参考ともならんかと茲に掲載することせり。尚本篇完結の上は順次二の組一の組等年長者の保育状態をも統載する予定なり。」^{（注2）}

（注2） 同右、二一ページ。

筆者の池田とよ（のちの野間とよ）は女子高等師範学校を明治四十一年に卒業し（理科）、母校に就職し、保母兼教諭として大正十年にいたるまで勤務していたことから、この《某幼稚園》は女子高等師範学校附属幼稚園であり、《某氏》は筆者自身であろうと推定される。対象の幼児数は男児、女児それぞれ二十名ずつ、合計四十名であり、入園の日から三日間は部屋で自由に遊ばせることで幼稚園に慣れさせ、その上で一年間を五つの時期に大きく分け、それぞれの時間割を紹介している。朝の《会集》と昼の《帰り支度》は別として、保育内容は（一）《遊戯》（内遊、外遊）、（二）《唱歌》、（三）《談話》、（四）《六球》、（五）《積み木》、（六）《板排》、（七）《唱歌》、（八）《摺紙》、（九）《画方》からなり、各週日に配当されている。最初の《遊戯》の《題目及順序》を眺めてみよう。^{（注3）}

（一）遊戯

一 列行進

蝶

雁^{かり}

鳩^{はと}ぼつば

風車^{かざぐるま}

結^{むす}んで開^{ひら}いて

蓮^{はす}の花^{はな}

雀^{すずめ}

禮^{れい}の遊^{あそ}び

渦^{うず}巻^{まき}

(注3) 同右、二三ページ。

私たちはここに《結んで開いて》がはじめて姿を見せたのに気がつくのである。《結んで開いて》が《遊戯》の中に位置づけられていることも注目すべきであろう。つづいて(二)の《唱歌》には《蝶》、《君が代》、《桃太郎さん》、《雪やこん／＼》などが合計一九曲挙げられているにもかかわらず、《結んで開いて》は《唱歌》としては収められていないのである。さらに《婦人と子ども》第三巻第四号(明治三十六年四月号)には《保育事項実施程度》なる課程表、そして第六号(明治三十六年六月号)には《幼稚園の遊嬉》なる上記課程表を解説している文章があり、そこから《一列行進》以下《渦巻》まで《結んで開いて》をのぞく全九種が女子高等師範学校附属幼稚園でおこなわれていたことが明らかとなる。^(注4)とすれば《結んで開いて》は明治三十六年以降から明治四十二年にいたる期間に、この幼稚園の《遊戯》の保育内容として加えられたものということになるだろう。私たちは、この明治四十二年の記録から、《むすんでひらいて》がすでに明治時代から《遊

戯歌》として位置づけられていたという事実を知ることができるのである。もちろん、この資料には曲譜はつけられていないが、別の旋律ということはおよそ考える必要はないだろう。

(注4) 《婦人と子ども》第三巻第四号(明治三十六年四月五日発行)六一ページ―六二ページ。同誌第三巻第六号(明治三十六年六月五日発行)六五ページ―六八ページ。なお、第七号、第八号にも合計十六種の遊嬉の追加があるが(第七号、五五ページ―五七ページ、第八号、五九ページ―六一ページ)、《結んで開いて》は含まれていない。

池田とよは前記の文章で、幼児の有様を叙述しているが、遊びは大抵は部屋の中でおこなわれるが、天気がよいと外に出ても遊びがおこなわれることを指摘している。そしてさらに次のように語るのである。「頓^{うづ}がて楽器^{がくき}に合^あせて会集^{かいしゅう}に行く^{いく}此時^{このとき}気^きも心^{こころ}も新^{あらた}らし。頓^{うづ}がて一の組^{くみ}を始め三の組^{くみ}に至^{いた}る迄^{まで}一人^{ひとり}の指導^{しどう}の下^{もと}に歌^{うた}ひ舞^まふ紅葉^{もみぢ}の如^{ごと}き手^てを差^さし上^あげて『蝶々^{てつてつ}』と余^よ念^{ねん}なきも実^{じつ}に愛^{あい}ら^(注5)し。」これはもとより《結んで開いて》を対象としているものではないが、この曲も同じようにして幼児たちが体を動かし、手を動かし、そして声を合わせて歌ったものであろう。

(注5) 池田とよ《幼稚園に於ける幼児保育の実際》二六ページ。

こうして《むすんでひらいて》は、明治の末年から、幼稚園の

保育活動の中に位置づけられていったのである。この歌が《幼
子の歌》、あるいは《幼な子の遊戯歌》として、さらに大正から昭
和へと、幼稚園都市の中で確実に、着実に普及していったことは

疑いない。たとえば昭和二年に刊行された高橋キヤウ著《唱歌遊
戯》^(注6)なる本がある。この著者は昭和四年から東京女子医学専門学
校体育科教室に属し、同年《行道遊戯》なる著書も同じ出版社か

ら刊行しているが、女子高等師範学校
附属小学校にも関係があったと思われ
る存在である。著者は《唱歌遊戯》で
合計十一曲を選び、曲譜を挙げた上
で、遊戯動作を解説しているのだ
る。

(注6) 高橋キヤウ著《唱歌遊戯》

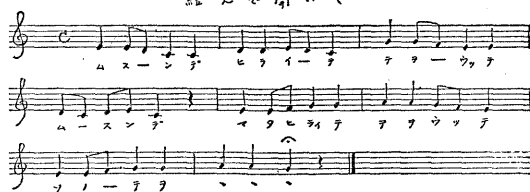
(右文館・昭和二年)

その冒頭を飾るのが、ほかならぬ
《結んで開いて》なのである。ここで
はまず曲譜を掲げた上で、本文を引用
してみよう(譜例1)

「結んで開いて」

▼ 譜例 1

結んで開いて



隊形

任意。例へば、一列円形又は半円形を作つて、円心に向つても
よいし、好きな所に位置をとつて指揮者の方にむいていてもよ
い。時には指揮者の方に向かなくてもよい。

方法

結んで、

臂を前に挙げて拳を握る。唱歌に連れて軽い振動が起るであ
ろう。——以後も——

開いて、

拳を開いて五指を伸ばす。

手を拍つて、

拍手すること四回。

結んで、

再び前のやうに拳を握る。

又開いて手をうって、

前にしたやうに拳を開き、そして拍手をする。

其の手を、

拍手を続ける。又は『手をうって』で拍手した後の姿勢のま
まで、次に来る注文をしづかに聞いている。

上に。(胸に、床に、其の他任意)(又は合図だけ)
いち早く手を上に挙げる。

注意

(一)しづかに歩きながら行ってもいい。

(二)何回も繰返して行ふ度毎に其の終には異つたいろ／＼の運動姿勢を要求する。そして練習がつめば随分複雑な要求をすることが出来るやうになる。即ち

(イ)両臂に同じ運動を要求する。

(ロ)片方の臂ばかりに運動を要求する。

この時は『其の手を』といふ時に『右手を』又は『左を』と限定しておく。

(ハ)片方ずつ別々の要求をする。

あらかじめ約束をしておいて其の約束を行ふ。

例『右臂上の時は右手は下に、『右臂上の時は左手は右手より少し下げて並行に奉げる』等。

他の臂は要求された片方の臂に釣合ふやうに任意に考案して行ふ。

臂ばかりでなしに、全身の調和釣合を考へ、要求された片方の臂を中心にして、同時に全身に変化を起すやうに

例『右手を上に』との要求で

或人は右臂を上に挙げ、左臂を左斜下にして体重を一脚に托し、他脚を軽く後方に挙げ、左肩を落し体をそらして右を仰ぐマーキュリーの像のやうな姿勢をとるであらう。

或人は右手を上に挙げ左手を体の前又は腰にし、片方の足を前又は後に出し、左後下方を視るやうな姿勢をとるであらう。

或は又キュービッドが戯れに矢を投げるやうな姿勢をとる人もあらう。睨いて姿勢をつくる人もあらう。単に右臂をふり上げてものをうつ姿勢をとるのもそれでよいし、体操でするように、直線的に右臂上左臂左に挙げた膝を屈げ股を前に挙げるのもよい。

人によって千差万別、どのやうにでも行ふことが出来るものである。

(二)指揮者の運動を模倣する。

(三)反対観念を利用して——『上に』といったら『下』にとらせる。——此際組分けをして対抗して行ふと競争遊戯にもなる。

(ハ)凡てを全く行ふ人の任意にさせる。

此時は『上に』といふ時に単に合図だけをすることにしておく。

合図によって手許りでなく、全身の姿勢を全く任意に。」

(注7) 同右書、三ページ―五ページ。

この著書では、『結んで開いて』の遊戯歌としての基本的運動の説明と、さまざまな運動のヴァリエーションのサジェスションがくわしくおこなわれているのが特徴であろう。著者はなお、さまざまな考案が可能である点を指摘しつつ、教師が巧みに指導をおこなうよう勧め、この遊戯用唱歌の意義を最後に「かくして各種の運動に習熟させ、姿勢を工夫させ、表現的動作の基礎をつくることにつとめるやうに」^(注8)という言葉で表明するのである。

(注8) 同右書、五ページ。

このようにして、私たちは、『ルソーの夢』の旋律が、日本においては明治末期から昭和初期にいたる幼児教育活動、保育運動の中で、『むすんでひらいて』という〈遊戯唱歌〉、あるいは〈唱歌遊戯〉のかたちで、幼稚園の教育活動や小学校の教育活動の中に位置づけられたのを知るのである。

たとえば東京女子高等師範学校（現お茶の水女子大学）附属幼稚園の編になる『系統保育案の実際』^(注9)（昭和十年）の〈年少組、第一保育期〉のカリキュラムでは、〈保育設定案〉中の〈課程保

育案〉の〈唱歌・遊戯〉の項目の中で、〈第一週（四月八日ヨリ）〉の中に〈行進〉、〈円形を作る〉のあとに、また『蝶々』に先立って、『結んで開いて』は位置づけられている。^(注10) こうして、私たちの歌『むすんでひらいて』は幼稚園保育の中で、絶対必要欠くべからざる教材として、かならず取り上げられ、幼稚園児はだれひとり知らないものはない〈幼な子の歌〉となったのだ。それは幼稚園の園内でだけ歌われ、遊戯がおこなわれたのでもない。幼稚園を越えてたこの『むすんでひらいて』は、家庭でも、あるいはまた小学校の初学校でも、ひろく子供たちの歌としててはやされ、さらには母親や家族が、あるいは教師たちが子供たちに歌いかけ、またともに戯れることで、大人までもが幼な子たちと無心の声や身体の動きを共有する類いまれな曲として、日本全国津々浦々にいたるまでひろく浸透していったのである。

(注9) 東京女子高等師範学校附属幼稚園編『系統保育案の実際』（日本幼稚園協会・昭和十年七月）

(注10) この〈保育案〉は昭和十六年に改訂されているが、四月一日からはじまる第一週の〈課程保育案〉の中で、『結んで開いて』は変らぬ位置づけをもっている。

(つづく)

(国立音楽大学)